

<ワン・ポイント・レクチャー> こども未来コース(基礎編)

第3回:うちの子どもは問題児?

“問題児”って、どのような子どもを言うのでしょうか?脳に器質的な変化がないにもかかわらず
① 性格・行動が多くの子どもと異なる点が多く、教育上特別な配慮と指導を必要とする子ども ②
その言動が周囲との調和を欠くため、しばしば問題視される子ども、つまり、集団生活の中で目立
ってしまう子どものことを言います。

ただ、誰一人として生まれた環境も育つ環境も同じ人はいませんので、多くの子どもと異なる点
があっただけで済むべきですし、それこそが個性・キャラクターと捉えることが出来るのではないでしょ
うか。にも拘らず、多くの子どもと同じような子どもにすることが、本当にその子にとってどうなの
でしょうか?

そもそも子どもは生まれ出た後に置かれる環境の変化に順応・適応するために、カメレオンの
ようにさまざまな色に変わることによって生き延びることが出来ることと同じように、子どもが問題
行動を起こすようになったとすれば、子どもを取り巻く環境要因が大きく影響していると考えられ
ないでしょうか?つまり、問題行動を起こすには原因と理由があますので、むしろ“問題”なのは子
どもではなく、取り巻く環境にあることが考えられます。そのように考えると、問題行動をする子
どもを変えようと四苦八苦するより、先ずは子どもを取り巻く環境を変えようとするのが先決で、
その上で、人間不信や愛情欠乏に陥っているであろう子どもに対して愛情を注ぐ対応をすることが、
問題行動を起こさない子どもを育むこと、あるいは問題行動を起こさない子どもへと変化をもたら
すことに繋がることになるのではないのでしょうか?

同様に、問題児として非常に誤解されやすい発達障害児(広汎性、学習、注意欠陥・多動性)に
ついては、その障害特性に対する理解を深め、特性に沿った対応の仕方を工夫しながら発達障害
児に関わる努力を続ける限りにおいては、“厄介な行動”と捉えていたものが“厄介”という言葉
を外した“通常の行動”へと理解が深めることが出来るようになります。

つまり、発達障害児のみならず問題児の言動を変えようとする以前に、児を取り巻く“環境(保護
者を含む)”自体を変えようとするのが児と環境との関係の再構築に繋がり、双方にとって生きや
すい社会をもたらすことが出来るのではないのでしょうか。